

資料 2

平成 22 年度第 3 回汽水湖汚濁メカニズム解明調査ワーキンググループの指摘事項等について

汚濁負荷量について

助言・指摘事項	対応
市街地系についての検討予定はどうか。(山室委員)	市街地系については、取りまとめ中。
山林系の原単位について、平成 3 年度と平成 19 年度の調査データをあわせることによりデータ数が増え、低水時もカバーできるかどうか、検討する必要があると思う。(星野委員代理)	当面、平成 19 年度調査結果による原単位を用いる。

シミュレーションモデルについて

助言・指摘事項	対応
観測経験上、大橋川から塩水が多く入った場合、1 回の流入で約 20 ~ 30 cm。モデルの最下層の厚さを 45 センチに設定していると、塩分が半分になり、次の混合ではすぐ混ざりやすくなるし、それに伴う様々な影響があると思う。(石飛委員)	「大橋川の最新の地形情報と現在設定している地形情報の比較」、「湖内の連続観測データと計算結果の比較」を実施し、流動モデルの再現性向上の為に必要な対応について検討する。
大橋川の中にあるシルの部分については宍道湖の水質の再現に当たって非常に大事な部分。シルの地形は水平方向で異なるので細かく区分したいが、計算時間との兼ね合いで制限はあると思う。(中村委員)	
高出水時、N6 の下層塩分の計算値は上層塩分の低下に呼応して下がっているが、下層実測値は高い値を示している。(大谷委員)	
鉛直混合の再現性は DO など水質再現に影響するので、向上させる必要がある。(石飛委員)	
COD のうち D-COD が約 7 割を占め、これを維持するため分解速度を小さくしたと記述しているが、溶出を増やしてはどうか(山室委員)	
湖水中の有機物の分解速度も分けた方が良さだろう。(中村委員)	湖水の COD 分解速度について、易分解と難分解に区分することの検討する。
湖水最下層の窒素の挙動について、DO が無い条件下で脱窒が起きる設定であるが、酸素がある程度存在しても脱窒は進行する。(清家委員)	
	宍道湖・中海における既存の知見を収集し、計算結果の検証を行う。

NP 比について

助言・指摘事項	対応
流入河川の NP 比の増減原因は、なにか。(山室委員)	データ確認中。

プランクトンについて

助言・指摘事項	対応
植物プランクトンの計算で炭素量が一時期下がっていることについて、「種組成」や「ピコシアノバクテリアの有無」等についても併せて確認したほうがよい。(大谷委員)	データ確認中。

平成 22 年度調査 (中間取りまとめ) について

指摘事項	対応
プランクトンの蛍光量について、藻類により異なると思うので、経月変化で示すのが妥当かどうかと思う。(清家委員)	妥当で無いと判断し、経月変化で示すことをやめた。
クロロフィルと PN の相関を示しているのと同様に、COD とか PC 等の相関についても併せて記載した方がよいと思う。(清家委員)	確認したが、相関は認められなかった。
(29 ページの下グラフについて) 宍道湖 TP 現存量は、8 月 20 日頃に一旦下がっているが、8 月 16 日頃に一旦全層混合したということであれば、それによるものであり、再度の成層形成により磷が溶出したと思われる。8 月 20 日頃からの 2 から 3 点から溶出速度を算出すると、20 から 30 位になるのではないかと思う。(中村委員)	再度の成層形成により磷が溶出したとして、再計算した。
植物プランクトンの優占種の表において、表層に優占していたアオコについても併せて記載したほうがよいと思われる。(大谷委員)	アオコについても併せて記載した。
26 ページのグラフにおいて、温度も併せて記載したほうがよいと思われる。(星野委員代理)	温度も併せて記載した。
(26 ページのグラフについて) 8 月 2 日以降の電気伝導度の高い部分があり、同時期、溶存酸素濃度が低くなっているが、溶存酸素濃度の方が厚くなっているように見える。その詳細等を確認した方がよいと思う。(石飛委員)	溶存酸素濃度が低いことを確認した。電気伝導度は 10cm ピッチ、溶存酸素濃度は 100cm ピッチで測定しており、作図ソフトの影響で、厚く表現されたと思われる。